



Name 作家名：三浦 清史

Title of the project (work) プロジェクトまたは作品タイトル：

The Wall of 千鳥格子と‘き’がわりの假具

Year of realization 実現(予定)年： ぼちぼち

Description プロジェクトまたは作品についての記述：

■ 住まいは短寿命であればあるほど良いと考え、それを実現するための^{インフィル}舗設となること、それがこの‘き’がわりの假具の目的です。

■ ■ もちろん器としての「住宅」は、環境資源の論点からも文化の観点からも長寿命であるべきかもしれない。しかし人生は一度しかなく、その時その時の状況、条件を享受して生活しています。従ってさまざまな‘き’に応じてもっとも相応しい空間の中にいることこそが幸せで、「住宅」の中にもこうした‘き’がわりのシステムを持つことができれば「住まい」はせめて‘期’がわりの寿命までがいいだろうと考え、‘き’に応じて着せ替えることができるような仕組みを考えこれを「假具」と名づけました。

■ ■ ■ ‘き’がわりの假具はVフレームやWフレームによる軸組、千鳥格子による下地、ファスナー止めによる仕上の三つの技術をもとに考えています。そのアウトプットは既存の部屋に入れ子のように納める今日の方丈と、ヌードの「住宅」にセルフビルドで仕上げてゆく下地と内装のカバーリングシステムです。

■ ■ ■ ■ かつての日本の「住宅」には完成されずに徐々に出来上がってゆくという仕組みがありました。例えば土壁は荒壁のまま放置して何年か後に上塗りをし、天井は経済的な余裕ができてから張る、母屋に下屋を増築することによって家の規模を大きくした、しかし現在の「住宅」ではつくり急ぐあまり竣工が終点で、それらの伝統が失われてしまいました。‘き’がわりの假具によって、住みながら完成させてゆく仕組みと、季節の変化などに合わせて内装を変えられる仕組みを提案したいと思います。

■ ここに展示する「The Wall of 千鳥格子」は‘き’がわりの假具からスピノフした柱間装置のひとつです。



Reference images (drawings, photos, models) :

